発　行
北海道ポーランド文化協会
〒060－0018
札幌市中央区北 18 条
西 15 丁目 3－19 安藤方
電話・FAX 011－556－8834
hokkaidopolandca@gmail.com

POLE

第 99 号　2020.1.30
北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会
東京事務所
〒107－0052
東京都港区赤坂
9－6－29－309
音響計画㈱ 霜田気付
電話 03－6804－1058
FAX 03－6804－6058

● 第 33 回定例総会&懇親会（豊平館、2019.10.12）

定例総会には会員 16 人、懇親会には日本人会員 18 人、一般 7 人、札幌フォークダンスクラブ 7 人、北海道 aibo の会 9 人、ポーランド人と家族 17 人が参加し、有意義で楽しい会になりました。

ポーランドでは最も高貴で由緒正しき色と聞くクリムゾン色の懇親会場は今年で 2 回目、参加者のファッション感覚も、豊平館の芳しい色調空間に少しずつ染まってきたように思えます。ポットラック式で持ち寄ったご馳走のバランスも、参加者の経験と見事な連携が目に見える形になっていました。

平和への祈り

プログラムは坂田朋優さんのピアノ演奏「アヴェ・マリア」に始まり、安藤むつみさんのピアノとボーカルで「今日は帰れない」、松山のサクソフォンでショパンと、音楽のことばによる 3 つの「平和への祈り」が奏でられました。若者たちはみな森に潜み迫りくる侵略軍を迎え撃つ覚悟で、愛し合う二人の幸せは引き裂かれ、今宵こそは永遠の別れとなるかもしれないと誰もが予感しています。いよいよ彼女に告げなければなりません「今日は帰れない」と。

今日に至っても解決の見出せない悲嘆への私たちの祈り…私たちの目にも見える最も尊きもの、それは「美しく育っている若者たち」であり、彼らの美しさは世界共通です。

若者たち

リリアナ・コワルスカさんのサクソフォンは 2 年前の懇親会がデビュー、今年はホルンの佐藤優羽さんとのデュオで心安らぐ演奏を聞かせてくれました。

第二部では、若者が突然立ち上がり真っ直ぐにピアノの方へ歩み出て弾き始め、淡々と祈るように内面世界を開示して聴衆の心を魅了しました。私たちの知らないメロディーでしたが、何故かとても懐かしい、ミコワイ・ジェプカさんのピアノデビューでした。

“Undertale”というロールプレイングゲームの挿入歌で、参加者が主人公となりさまざまな試練を乗り越えてゆき、悪魔の囁きに呼応した殺戮からの悔い改め、非暴力、和解という「認知」へ到達する壮大な舞台だそうです。ゲームの世界に私は全く無知ですが、彼の演奏から、むしろ若者たちから教わるべきことが多いのではないか、また、この世に生まれてきた意味の探究において、互いの関心事を音楽や詩を介して肝胆相照らし、世代を超えた共通の到達点を見出せるのではないかと感じました。

そのほかフォークダンスやロボット犬 aibo のパフォーマンスなどもあり、「午後のポエジア」などでも培われてきた、ポーランドと日本を中心とする、世代と国境を越えた国際的な文化交流のさまざまな企画の場として、本協会から溢れ出るパワーをもって外に向かって共に発信してゆく喜びをひしひしと感じることができました。　（松山敏　文と写真）

The・座談会　安藤厚×氏間多伊子×佐藤晃一×松山敏

映画の感動をシェア！

2018 年｜原題 ZIMNA WOJNA｜ポーランド・イギリス・フランス｜ポーランド語・フランス語・ドイツ語・ロシア語｜モノクロ｜スタンダード｜5.1ch｜88 分　※日本語版 DVD 発売 2020 年 1 月 8 日

氏間：佐藤さんからの電話で助かりました。見逃すところでした。感銘をうけた映画『イーダ』=写真左=の監督というだけで『COLD WAR あの歌、2 つの心』は見なくちゃと思っていました。今日はこの作品の一番のお気に入りの部分やご感想を聞かせてください!

佐藤：この映画は札幌では 1 週間限定の上映で残念でした。この監督をワイダやスコリモフスキに続く社会派と捉える向きもありますが、監督自身はそうした風潮には一歩距離を置いて「映画はイデオロギーを表現するものではなく、あくまで芸術的な価値を求めるもの。本作でも歴史的、政治的な事柄を訴えたかったわけではなく、テーマは主人公二人の恋物語。キャラクターが鮮烈であれば、物語や歴史的背景も生きてくる」と政治思想にはとらわれない映画作りを目指したようです。主役が二人とも魅力的、特に女優のヨアンナ・クーリクが…

氏間：同感です! いわゆる年の差恋愛ですが、ヨアンナ・クーリク扮する役名ズーラという少女の成長も描いていて彼女が実に魅力的。ヴィクトルとズーラふたりの感情は終始必要最小限のセリフの中に隠され、それぞれの時間をそっけないほどの暗転のくり返しの中に描いているんですが、不思議にとても濃密な印象があります。

ショパンと響き合って

松山：私は劇場鑑賞には間に合わず、英語版 DVD でみましたよ。主人公のヴィクターには、かなり明瞭にショパンの情念と行動の傾向がにじみ出ていると思いますね。偶然かもしれませんが、冒頭のオーディションシーンで歌われている“Ja za woda, Ty za woda”は、ショパンが“Grand Fantasy On Polish Airs” Op.13 のオーケストラの導入部に引用した美しいマズルカです。

氏間：ショパンとの関連を指摘されて「芸術と亡命」、異文化との接触も丁寧に描かれていることに気づきました。さらに脚本もいいのでは。冷戦を前面にくり広げる展開かと思いきや…伝統音楽の良質のドキュメンタリー映画を思わせる録音風景から始まり、あとになって冒頭の数分間は社会主義体制下、政府の文化政策の一環で新舞踊団の準備のためだったと分かります。同時に史実がモデルに。1948 年設立の「国立マゾフシェ民族合唱舞踏団」の存在がありますから…NHK「みんなのうた」で放送されて有名になった「踊ろう楽しいポーレチケ」がすぐに思い浮かびますよね（笑）。それになんと 11 月には、日本・ポーランド国交樹立 100 年記念の大全国ツアー中のポーランド国立民族合唱舞踏団「シロンスク」（1953 年設立）公演を間近に見る機会もあり、こちらも感激しましたァ。

冷戦下の有為転変

佐藤：よかったですね。ところで冷戦下の 1949 年ポーランドでピアニストと歌手志望の少女が運命的な出会いを果たし、時代の波に翻弄され東西を行き来しながら別れと再会をくり返すこの二人は、監督の両親がモデルだそうで、日本映画では『君の名は』、ポーランド映画では父の体験を描いた『カティンの森』が頭に浮かびますね。

ある雑誌のインタービューで監督は「母はバレリーナで 17 歳の時に 10 歳年上の父と出会いすぐに惹かれ合ったそうです。以来ふたりは別れたりふたたびくっついたりしながら、欧州を転々と。60 年代になるとポーランドは共産主義が退化、モダンジャズ等の西洋文化が流入し、比較的自由な空気に包まれましたが、この映画はそれ以前の困難な時代に自分自身のルーツに対する思いを重ね合わせたものです」と語っています。

安藤：画面に○年○月というテロップがくり返し出ますね。ポーランドの年配の観客には日付の意味がすぐわかるのでしょう。私たちでも思い浮かぶのは、戦後のスターリン体制の最盛期、その死(1953)から、スターリン批判の開始・ポズナン暴動・ハンガリー動乱(56)、ベルリンの壁構築(61)に至る引き締めと融和策のくり返しです。

2 つの心、4つの瞳～いのちの限り愛す

氏間：確かに…時系列に従って舞台が移り変わりますが、劇中に流れる曲は《オヨ～ヨ～ィ》というリフレインが印象的な愛の民謡「2 つの心 Dwa Serduszka」、物語が進むにつれいろいろなバージョンに姿を変え心に染み入る忘れられない名曲《ヴィクトルとズーラ⇒2 つの心》へと…。パリで濃密に愛憎劇が展開するあたりは、生き抜くため複雑な愛情表現にならざるを得ません。違った環境でも、このタイプはエネルギーに溢れ常に戦っていて、強烈でいつも動き回って稀有な相互理解関係を結び、結局はたぶん一緒にはなれない孤独なる魂かと…。超越できるか…、サステナブルか…、やはり絶望的な関係でしょうか…

安藤：ロシア革命と内戦の中で多くの作家や芸術家が西側（向こう側）へ亡命しました。その後、ナボコフのように米国で大成功する作家もいれば、ゴーリキーのようにソ連に戻って作家同盟議長まで上り詰めた者もいます。冷戦時代ポーランドでも同じことがくり返されますが、映画の主人公たちは収監覚悟で帰国し死を選ぶわけで、とても美しいドラマに仕上がっていますね。

松山：その昔から、重税、兵役、強制改宗などの政治的圧力から逃れた亡命者たちの帰国がいかに困難だったかが描かれていますね。

また、冒頭とラストの教会の廃墟は大戦の傷痕か、あるいはポグロムかホロコースト後に放棄されたシナゴーグなのか...剥がれた漆喰の痕にイコンがみえるのは何故か…いずれにしても、人々の究極の祈りは未だ聞き入れられず、神は沈黙を保つ。

吹き抜ける風の向こうへ

氏間：松山さんは DVD でくり返し確認できますね（笑）。十字路のある風景に佇み教会の廃墟で二人が画面右へ消え、繊細な哀しみを漂わせて野分めいた風が吹き抜け…ラストクレジットに流れるグレン・グールドの弾く「ゴールドベルク変奏曲」の「アリア」が二人の魂を浄化するように深い余韻を残します…人々が明確な選択を下した時代でした。

みなさま! 楽しい時間をありがとうございました。

（あんどう・あつし、うじま・たいこ、さとう・こういち、まつやま・さとし）

パヴェウ・パヴリコフスキ 監督

1957 年ポーランド・ワルシャワ生まれ。14 歳で母国を離れ、ヨーロッパ各地を転々としたのち英国に拠点を構え、80 年代末からドキュメンタリー番組を監督。母国で撮影した「イーダ」(2013)がポーランド映画初のアカデミー外国語映画賞を受賞。同じく母国で製作した「COLD WAR あの歌、2 つの心」(18)で第 71 回カンヌ国際映画祭最優秀監督賞受賞、第 91 回アカデミー賞では外国語映画賞・監督賞・撮影賞の 3 部門にノミネート。

ポーランド&ニッポン歳時記 31

「ロラティ」

冬には陽が早く沈み、遅く昇ります。この時期、朝早く子供たちがときには手作りの提灯を持って、教会に集まるという面白い習慣があります。「ロラティ roraty」（ラテン語の「ロラーテ」から）と呼ばれます。おかげで、クリスマスまでの間、私たちの住んでいる周辺もより暖かく感じることができます。

bezlistne drzewo　　宿木の
i tylko wciąż jemioła　　緑溢るる
zielona rośnie　　枯れ木かな

Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

noc się wydłuża　　夜が伸びて
na Warszawie Zachodniej　　寒風さわぐ
hula wiatr zimny　　西の駅

Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

小樽より戻れば恋し冬の海
冬濤（なみ）や没五十年伊藤整

岩見沢市、霜田千代麿

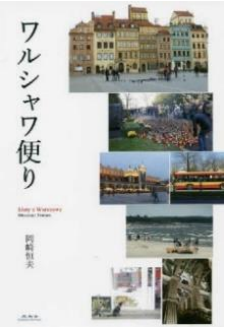
《新刊紹介》

『ワルシャワ便り』岡崎恒夫著

未知谷、2019.9

岡崎恒夫先生の若々しいお声の明快な語り口による「ワルシャワ便り」を毎月 NHK「ラジオ深夜便」でお聞きするのを楽しみにしておりました。ときおり放送を聞きそびれたり、月刊誌を買いもらしたりすることもありましたので、この度 2008～19 年までの 10 年にわたる貴重なお話を本の形で読めるようになりましたことをたいへん喜んでおります。

一般に未知の国の情報として知りたいのは、その国の地理・自然・風土・言語・文化・国民性・生活習慣・食事（特に固有の料理）・交通事情・教育・歴史・政治体制などだと思います。本書は、ポーランドに関するそれらの情報をすべて網羅していて、まさに「ポーランド事情百科」の観があります。初めてポーランドを訪れる人にとっては必読の書であるばかりでなく、ある程度ポーランドを知っている人にとっても有益な記事がいっぱい詰まった興味ぶかい読み物だと思います。



私事にわたって恐縮ですが、わたくしが最初にこの国を訪れ、一年暮らしたのは 1976～77 年のことで、ソ連型共産主義の暗い時代でした。肉や米などの食料やトイレットペーパーやティッシュペーパーなどの生活必需品が手に入りにくい日々でした。そのような時にいつも重要な情報を提供してくださったのが岡崎先生でした。ある日、町の中心地にある魚屋に「イカがはいりましたよ」とお電話をくださり、すぐさま市電に乗って「ツェントラルナ・ルィブナ」とかいう店にとんで行き、マレーシア沖で獲れたというイカの冷凍を買ったことを思い出します。

女性にとっては精神文化よりも食文化のほうが切実な問題なので、本書の「食生活」「ポーランドの料理」「秋の味覚」「ポーランド人と魚」「市民の台所=ハラ・ミロフスカ」「三大珍味」「食べるお祭りイースター」などの記事は、時代の激変を回想しながら特に興味ぶかく読みました。

政治体制が変わっても永遠に変わらないのは、ポーランドのカトリック精神だと思います。11 月 1 日の「万聖節」やクリスマスの記事は感激的です。

日本とポーランドとの文化交流の媒介となったワルシャワ大学日本学科の重要性は本書の各所に読み取れます。　（栗原朋友子、八王子市）

二風谷ツアーに参加して

三上 和子

会誌 98 号に同封されていました、平取町立二風谷アイヌ文化博物館第 25 回特別展「1903 年夏の平取～B・ピウスツキたちの短期調査より」のチラシを見て「行きたい!」と思いましたが、赤平から平取まで車で行く自信はありません。バスで行けそうですけれど日帰りは無理。温泉までバスもタクシーもないらしく、あきらめたところへ、ツアーのご案内のハガキが届きました。

まだ会員ではないのに参加させていただき本当にありがとうございました。この機会に（現地で）入会させていただきました。赤平に住んで、シカ、キツネ、蛇、エゾリス、小鳥達と共生しております。どうぞよろしくお願いします。

去年ショパンのピアノ曲のコンサートに参加して、ポーランド文化協会とブロニスワフ・ピウスツキを知りました。それから POLE を毎号送っていただき「文化の香り」がする会誌が届くのが楽しみでしたし、100 年前にこれほど優れて、弱い立場の人々をあたたかく見つめた人がいたことが驚きでした。

博物館に入りピウスツキのパネル写真を見た時には胸が熱くなりました。井上先生の講演と映画『Ainu｜ひと』を観たあと、映画にご出演の川奈野一信さんとお話ができて、松山敏さんに写真を撮っていただきました。以前からアイヌの人達には「ごめんなさい…」と思う私は「鮭を捕るくらい何だってさ!」と考えてしまいます。

平取は遠くて交通の便が良くありません。特別展を札幌で開催できたら良いのに…。

100 年前のピウスツキ達の平取までの往路、ポーランドまでの復路を、最近通販で買い求めた地球儀で見つめながら「人差し指の旅」をしています。

100 年後の今の、香港はじめ世界の各地の人々に思いを巡らせながら…。11 月 17 日にお世話になりました皆様、ありがとうございました。

（みかみ・かずこ、赤平市）

（上）筆者と川奈野一信さん
（下）ツアー参加のみなさん
（写真 新井藤子）

アマレヤとアイヌ女性の舞踏劇の理解のために

丸山 博

2019 年のアマレヤとアイヌ女性の舞踏劇「(残)響 ポーランドと日本に架ける橋」は、アマレヤ劇団が日本とポーランドの国交樹立 100 周年記念事業の一環として、ポーランド文化・国家遺産省に承認されたプロジェクト「国境なき自立者:日本におけるポーランド」の中の一つのプログラムです。

日本側のパートナーは、2017 年からコラボをつづける二つの団体、アイヌ女性会議メノコモシモシ(代表 多原良子さん)と国際研究センターCemipos (Centre for Environmental and Minority Policy Studies, 代表 丸山博)。さらに「指輪ホテル」芸術監督の白玉羊屋さん、コンカリーニョ理事長の斎藤ちずさん、さっぽろ自由学校「遊」事務局長の小泉雅弘さんらが実行委員に加わり、プロジェクトの準備が進められました。

舞踏劇はアイヌ女性の物語にアイヌとポーランドの音楽、アマレヤの踊りなどが重層的に重なって展開します。札幌・琴似のコンカリーニョで 9 月 28 日(土)に2回上演され、地元紙・全国紙が大きな記事を配信してくれたことも追い風となり、190 名余りの方々に来ていただくことができました。

アマレヤ劇団

アマレヤ劇団はポーランドを代表する独立劇団の一つです。2003 年にカタジナ・パストゥシャク(カシャ)Katarzyna Pastuszak 博士とアレクサンドラ・シリヴィンスカ Aleksandra Śliwińska 博士らを中心にグダンスクで結成され、海外でも意欲的に作品を発表しています。また、日本の劇団解体社と長年共演し、国際共同制作にも参加する一方、身障者や薬物依存者らとの演劇プロジェクトにも取り組んでいます。

グダンスク市

アマレヤ劇団の本拠地グダンスクはバルティック海に面し、古くから交易や造船業で栄えた港町です。歴史的には他国の支配に屈せず、最近ではベルリンの壁の崩壊につながった連帯運動発祥の地でもあります。グダンスク出身のカシャは、その抵抗の歴史に誇りをもっていて、その思想を受け継ぎ LGBTQ、移民、マイノリティなどの権利擁護者としてポーランド社会をリードした、アダモヴィチ・グダンスク市長が 2019 年 1 月 14 日に暗殺されたときには大きな衝撃を受けていました。

私たちはなにを目指すか

最後に、舞台終了後の質疑応答で寄せられた、「内容がわかりにくい」という質問に対するカシャの回答を抄訳してみたいと思います。

《私たちは一つの筋の通った物語を伝えたいわけではありません。むしろ、観客の皆さんに体験していただきたいのです。私たちは皆さんの感情に訴え、反応を引き起こしたいと思っています。私たちポーランド人は自分が何者かをいつも考えています。ポーランドの歴史が権力者や体制によって絶えず書き換えられているからです。

今回の舞台では水田や小さな建物が望遠鏡を通した映像として映し出されます。その映像は少しぼけていて、望遠鏡をのぞいている人が焦点を合わせようとしています。それはパーフォーミング・アーツの際に私たちがよく用いるメタファー(比喩)です。大きな物語ではなく、「多様な個人の、様々なストーリーに焦点を合わせている」という意味なのです。

舞台上に小さな島をいくつか作りました。私たち人間は、離れ離れの島々に住んでいるからです。でも、それらの間に橋を架けることはできるのです。舞台で使われた糸はそうした橋のメタファーです。実際、糸はアイヌの工芸品にもポーランドの工芸品でも使われています。しかし、糸は細くて切れやすい。それはまた人間の口をふさぎ、声を殺します。しかし、同時に、人と人を結び、美しいデザインを紡ぎだすこともできます。こうしていくつかの意味をもつメタファーは、有機反応のように、多くの結びつきを生み出すのです。》

(まるやま・ひろし=写真上=室蘭工業大学名誉教授)

《第 92 回例会》2019.11.6 より

写真(左)舞台(左から)
後列 Yoshiko, Tsugumi, Ola, Kyoko,
前列 Kasia, Natalia, Kimiko
(右)質疑応答:カシャと松平亜美(つぐみ) (写真 尾形芳秀)

ダヌタさん、日本上陸へ

井上 紘一

本誌 96 号で紹介したダヌタ・オニシュキェヴィチさんはすでにマレーシアとその周辺国に滞在中。来年早々にはシンガポールを発って長崎へ入港(2 月中旬)、曾祖父ユゼフ・ピウスツキの兄ブロニスワフが日本に残した足跡を辿りつつ、九州から北海道までを三ヶ月で縦断する計画だそうです。

ブロニスワフの足跡を辿って世界一周へ

2019 年 1 月 7 日ワルシャワを発ったダヌタさん=写真上=はリトワニア、エストニアを経てロシア入国(サンクト・ペテルブルグ⇒モスクワ)、その後ウクライナのキエフ経由でオデッサに着きました(4/29)。ブロニスワフ・ピウスツキ(1866-1918)は 1887 年、皇帝暗殺未遂事件の既決囚として護送列車で帝都を離れ(5/27)、オデッサ着は 10 日後でした(6/6)。132 年後のダヌタさんは 3 倍の時間をかけて、ブロニスワフの軌跡をやはり鉄路で追ったわけです。(彼女の動静は facebook, instagram, youtube,本会 HP なども参照)

ブロニスワフは「ロシア義勇艦隊社」のニージニー・ノヴゴロド号で、オデッサからスエズ運河⇒コロンボ⇒シンガポール⇒長崎⇒ウラヂヴォストクを経てサハリンのアレクサンドロフスク哨所まで移送されました(6/9-8/3)。ダヌタさんも同じ航路でマレーシアへ向かう貨物船に便乗してオデッサ出港(5/8)、3 週間後クアラルンプールに入港しました(5/31)。

当初計画では別の便船で中国を経てロシア極東へ向かうはずでしたが、予期せぬ事態が出来し長期の足止めを喰らっています。マレーシアのロシア大使館で、ロシアへの再入国と長期滞在には然るべき機関の招待状が必須と告げられたダヌタさんは、招待主の探索に着手するも捗々しい成果が得られなかったのです。その間の食・住を確保し向後の路銀も蓄えるべく、ジョージタウンのキャンプ場でアルバイトを開始します。三ヶ月後にようやくユジノ・サハリンスクのサハリン州郷土博物館から招待状発行の受諾通知が届いたものの、ダヌタさんは極寒のロシアを回避すべく、年末までのマレーシア滞在を決断したそうです。9 月初めには滞在ビザ更新のため一時出国してヴェトナム・カンボジアを歴訪、同様に現在も隣国タイにおられるようです。

ダヌタさんは 1988 年、ルヴフ(現リヴィウ)出身のヤヌシュ・オニシュキェヴィチと、ユゼフ・ピウスツキの孫ヨアンナ(旧姓ヤラチェフスカ)の三女としてワルシャワに生まれ、大学・大学院では文化・映像人類学を専攻しました。彼女は B・ピウスツキの没後百周年を期して、超有名人である曾祖父のほとんど無名の兄が行った「ほとんど世界一周」の旅を「電子時代のエスノグラフィー」の標的に定め、友人のミハウ・ヤクボフスキ氏(IT 専門家=写真上右=)、ヨアンナ・バラノフスカさん(日本学者=同 左=)と語らって、ブロニスワフ(愛称ブロネク)の足跡を忠実に辿る「ブロネク・プロジェクト」を立ち上げました。彼女らはクラウドファンディングを介して有志の方々から浄財を募っていますが、いまだ資金は不足気味とのこと、この場をお借りして支援を呼びかけます。 👉 https://zrzutka.pl/t9uh3p

ダヌタさんはポーランド出発後、リトワニア・ロシア・ウクライナ・地中海・紅海・インド洋・東南アジアの一人旅をビデオカメラで仔細に記録し、その一部を youtube で公開中です。ゆくゆくはブロニスワフに関するデータベースをネット空間に立ち上げ、双方向的情報交流の場を創出する計画だそうです。

間もなく始まる「ブロネク・プロジェクト」日本篇では(予定されたバラノフスカさんの合流が資金不足で中止されましたが)インタビューを求められることもあるかも知れません。その際はよろしくお願いします。

彼女の旅はいまだ緒に就いたばかり、日本以降はロシア極東(沿海地方・サハリン州)⇒太平洋⇒米国⇒大西洋⇒欧州とはるかな長途が控えています。ブロニスワフの「ほとんど世界一周」の轍を踏まず地球周回を果たし、2 年後にはワルシャワに無事ゴールインされるよう願ってやみません。Bon voyage!

父ヤヌシュ・オニシュキェヴィチ

ダヌタさんの父ヤヌシュ・オニシュキェヴィチ氏は著名な登山家で、連帯運動の闘士でもあり、ロンドンから運動に馳せ参じたヨアンナさんとの獄中結婚は世界中に報道され、運動を大いに鼓舞しました。ヤヌシュ氏は連帯系内閣で国防相を2度務め、政治家・知識人としても幅広く活躍されています。本年 9 月 10 日、日本政府は同氏に日波関係における「外交・安全保障分野における協力及び相互理解の促進」への功績で旭日中綬章を授与しました(1928 年 J・ピウスツキ元帥に大勲位旭日桐花大綬章、2002 年 A・マイェヴィチ教授に勲四等旭日小綬章授与)。 (いのうえ・こういち、2019.12.2、札幌)

《新会員のひと言》

遠く美しい憧れの国ポーランド

小田 晃孝

ポーランドという国は私にとっては精神的にも地理的にもとても遠い国でした。なんとなくどこかで聞かされた時代の波に飲み込まれた不幸な歴史と、放射線研究でノーベル賞を受賞した物理化学者キュリー夫人くらいしか浮かんでこないという乏しい知識の上に、冷戦時代の閉ざされた東欧の国という暗いイメージを勝手に塗り重ねて、特別な興味を持つことなくこれまで暮らしてきたという訳です。

しかし、この会に誘っていただき、画面に映し出された美しい建物や民族衣装、自然の風景を見て、また小学校の時からよく知っている大音楽家ショパンが、てっきりオーストリア出身だと思い違いしていたのが、ポーランド出身だと聞いて驚き、さらにその後、大好きな女優ジュリエット・ビノシェが主演したことで映画館で見てその映像美に感動し好きな映画ベスト3に入った「トリコロール／青の愛」の監督であるクシシュトフ・キェシロフスキが、生粋のフランス人ではなく実はポーランド出身と聞いたことで一気に興味津々の国となり、ぜひ死ぬまでに一度は訪れたいと思うようになりました。

そしてフィンランドに新千歳空港から直行便が飛び始めたと聞いたので、機会を捉えて少し長い休暇が取れればポーランドの自然や文化、人々に触れる旅をしてみたいと思いますが、そこは貧乏暇なしの私ですので、実際の訪問は遠い話と思われ、この会を通じてその一端に触れることができればと望んでおります。

（おだ・あきたか）

ポーランドへの旅

中條 峰人

はじめまして。昨年北海道ポーランド文化協会に入会しました。会員の一員としてポーランド文化・歴史に触れる事で知識や交友関係を深める事が出来れば僕としては幸いです。

ポーランドに関わるきっかけは卒業旅行のアウシュビッツでした。そこにはホロコーストや戦争の惨劇を伝える為に数多くの遺品や写真が展示されていました。戦争を知らない年代である僕達だからこそ歴史を学ぶ意味が有り、同じ過ちを繰り返してはならない心構えを持ち続ける大切さを知りました。

あまりの惨い写真に言葉も出ず、ドイツが犯した過ちについても考えさせられましたが、戦時中に同じ過ちを犯し、アジア諸国に大きな苦しみを与えた日本の歴史も直視すれば、我々日本人も人殺しの子孫である事は間違いないのです。

このような歴史的負の遺産は、後世にも残し続けるべきであると思っています。

短いポーランド旅行ではありましたが、初めての一人海外旅行でもあり、僕の人生にとって大きな心の財産にもなりました。

ポーランドに関しては、未だ解らない事が殆どですが、会員の皆様との交流を通して、多くの事を学びたいと思っています。よろしくお願いします。

（なかじょう・みねと）

ズビグニェフ・ヘルベルト詩集
『我思う氏 Pan Cogito』より（栗原成郎訳）

Pan Cogito a ruch myśli

我思う氏(パン・コギト)と思考往来

思考たちが頭の中を行き来すると
常套句が口に出る

常套句が
思考の往来を過大評価する

思考たちの大部分は
身じろぎもせずに立ちつくす

荒涼とした風景のまん中で
灰色の丘陵のまん中で
枯れた樹々のまん中で

ときおり　それらは他人の思考の
急流にたどり着き
その岸辺に佇む
一本脚で
腹をすかした青鷺（あおさぎ）のように

悲しげに
涸れた水源を回想する
ぐるぐる回って
穀粒を探し求める

行き来することはない
たどり着かないのだから
行き来することなない
行き着く所が無いのだから

石の上に座ったまま
悲嘆にくれて手をもむ

頭蓋の
曇った
低い
空の下で

Pan Cogito a myśl czysta

我思う氏(パン・コギト)と純粋思考

我思う氏(パン・コギト)は
純粋思考を達成させようと努める
せめて眠りに落ちる前に

しかしその努力そのものがすでに
敗北の胚子をはらんでいる

それで「思考　水の如し」
と思う心境に達したとき
無関心な岸の辺(へ)に
満々たる純粋の水

突然　水面に波紋が生じ
波が打ち寄せ
ブリキ製の空き缶
流木
誰かの毛髪のひと房を運ぶ

本当のことを言うと　我思う氏(パン・コギト)に
まったく落ち度が無かったわけではない
彼は　内なる眼を
郵便箱から
離すことができなかった
鼻孔に海の香を嗅いでいた
蟋蟀(こおろぎ)が耳をくすぐっていた
あばら骨の下に存在しない女(ひと)の指を感じて
　いた

他の家具付きの思考のように
凡庸な状態でいた
椅子の肘掛の上に置かれた手の皮膚
頬の
優しさの皺

いつの日か
いつかのちの日に
彼が冷たくなったとき
「satori」(悟り)の境地に到る

そして師匠たちが指示するように
虚心で
驚嘆すべき者となるだろう

Dusza Pana Cogit

我思う氏(パン・コギト)の魂

かつて
ぼくらは　話に聞いて知っていた
魂は　心臓が止まったとき
体を離れていくのだと

最後の息と共に
静かに飛び去っていく
天の牧場へと

　　我思う氏(パン・コギト)の魂は
　　別な行動をとる

　　生きているうちに体を離れる
　　別れの言葉も言わずに

　　何か月も何年も
　　他の大陸に滞在する
　　我思う氏(パン・コギト)の国境の彼方に

　　その住所(アドレス)を知ることはむずかしい
　　自分の消息を知らせてくれないから

　　接触を避けて
　　手紙を書かない

　　いつ還ってくるか　誰も知らない
　　永久に立ち去ったのかもしれない

我思う氏(パン・コギト)は　嫉妬の卑しい感情を
克服しようと努力する

魂のことを　善意をこめて想う
魂のことを　優しさをこめて想う

必ずや他の人々の体の中にも
住んでいるに違いない

魂は　全人類に行き渡るには
確かに　少なすぎる

我思う氏（パン・コギト）は運命と和解する
それ以外に出口はない

せめてこれだけは言おうと努める
「ぼくの魂は　ぼくのものだ」

魂のことを　愛情をこめて想う
魂のことを　思いやりをこめて想う

それで魂が　思いがけず
姿を現わすとき
「お帰りなさい」
の言葉をもって迎えはしない

ただ横目で見ているだけ
魂が鏡の前に座って
もつれた　白くなった
髪をくしけずるのを

ズビグニェフ・ヘルベルト(1924-98) ポーランドの詩人、エッセイスト、劇作家。第二次世界大戦中、国内軍のレジスタンス活動に参加。1950 年代に詩を出版しはじめたが、間もなく自分の意思で政府公認の出版物に書くのをやめ、1980 年代に主に地下出版で発表を再開。戦後ポーランドの反体制派詩人を代表し、最も有名で最も数多く（38 ヵ国語に）翻訳された作家の一人で、何度もノーベル賞候補に挙げられた。(en.wikipedia より)

photo: Bohdan Maiewski / Forum. 1974

第 33 回定例総会議案

（議長 村田譲）

第 1 号議案 2019 年度(2018.9−2019.8)活動報告について(小笠原正明)

1.《第 32 回定例総会》、豊平館、2018 年 11 月 11 日(日:ポーランド独立回復 100 周年記念日)16:00〜20:00、参加者:総会 25 人、懇親会 日本人 40 人、ポーランド人&家族 21 人

2.例会

(1)《第 87 回例会》ポーランド名画ビデオ鑑賞会 2019、札幌エルプラザ 4F 大研修室、2019 年 2 月 20 日(水)18:00〜22:00『大理石の男』1977 アンジェイ・ワイダ監督&懇談会、司会:佐藤晃一、参加者約 30 人

(2)《第 88 回例会》「樺太時代の忘れ物」ポーランドへの誘い〜ブロニスワフ・ピウスツキ没後 100 年記念行事報告、講演:尾形芳秀、朗読:熊谷敬子、聞き手:松山莞太;國井星太、札幌エルプラザ 4F 大研修室、2019 年 3 月 3 日（日）13:30〜16:30、参加者約 60 人

(3)《第 89 回例会》ブロニスワフ・ピウスツキ没後 100 年記念講演の集い(2)〜日本・ポーランド国交樹立 100 周年記念、講師：井上紘一「ブロニスワフ・ピウスツキの生涯と仕事」、新井藤子「日本で取り組まれてきたブロニスワフ・ピウスツキ研究の系譜」、北大学術交流会館第4会議室、2019 年 3 月 16 日（土）13：30〜16：30、共催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、ポーランド広報文化センター、後援：ポーランド大使館、(公財)アイヌ民族文化財団、参加者約 40 人

(4)《第 90 回例会》朗読と交流の会:午後のポエジア 9〜私のポーランド〜日本・ポーランド国交樹立 100 周年記念、北大クラーク会館 3F 大集会室 2、2019 年 6 月 1 日（土）14:00〜17:00①ポーランドの絵本の紹介や古今の詩の朗読②語りとピアノ演奏、ギターと歌、スライドショー、劇、みんなで弾いて歌って踊ってなど、共催:ポーランド広報文化センター、後援:札幌国際プラザ

(5)《第 91 回例会》ポーランド名画ビデオ鑑賞会 2019-2、札幌エルプラザ4F 大研修室、2019 年 7 月 3 日（水）18:30〜21:20 トーク/作品とその背景:三浦洋&『カティンの森』2007 アンジェイ・ワイダ監督&懇談会、参加者約 35 人

4.会誌 POLE No.95 (2018.9.15), No.96 (2019.1.31), No.97 (5.1)発行

5.運営委員会 2019 年度①2018.10.4 ② 2019.1.29 ③4.22 ④7.29

6.共催・後援・協力事業

(1)〈後援〉松井亜樹ソプラノリサイタル〜ドームラ奏者アンドレイ・クガエフスキー氏をお迎えして、ふきのとうホール、2018 年 9 月 21 日（金）19:00〜

(2)〈協力〉ブロニスワフ・ピウスツキに関するコミック:ラファウ・ゴシェニエツキ画 2018 年 10 月

(3)〈後援〉徳田貴子ピアノリサイタル、ザ・ルーテルホール、2018 年 10 月 28 日（日）19:00〜

(4)〈後援〉北濱佑麻&徳田貴子ピアノデュオコンサート〜アメリカの風を感じて…、Kitara 小ホール、2019 年 1 月 23 日（水）19:00〜21:00

(5)《共催》さっぽろ雪まつり第 46 回国際雪像コンクールにザブジェ市から彫刻家コツランガ氏をリー

ダーとする Team Snow Art Poland が参加、大通会場 11 丁目国際広場、2019 年 2 月 3～7 日(日～木)

(6)〈後援〉NPO 法人まずるか北海道第 8 回東日本大震災被災者支援コンサート～私たちは忘れない!～日本ポーランド国交樹立 100 周年に因み～ピアノ:遠藤郁子、光塩学園天秘ホール、2019 年 3 月 9 日(土)14:46～

(7)〈後援〉ポーランド映画祭 2019 in 札幌、札幌市民交流プラザ 3F クリエイティブスタジオ、2019 年 4 月 13 日(土)10:25～15:15①B・ピウスツキの紹介:井上紘一&『ピウスツキ・ブロニスワフ～流刑囚、民族学者、英雄』2016 W・チェホフスキ監督&♫アイヌ音楽(トンコリ)ライブ演奏: OKI ②『イマジン』2012 アンジェイ・ヤキモフスキ監督③『チェコ・スワン』2015 アレクサンドラ・テルピンスカ監督、共催:ポーランド広報文化センター

(8)〈後援〉北大祭 2019 ポーランド料理テント Polski Namiot、北大総合博物館前、2019 年 6 月 7～9 日(金～日)、主催:北大ポーランド人留学生会

(9)〈後援〉日本ポーランド国交樹立 100 周年記念公演 遠藤郁子ピアノ・リサイタル、Kitara 小ホール、2019 年 8 月 23 日(金)19:00～

(10)〈後援〉日本アレンスキー協会創立 10 周年記念講演会&コンサート、Kitara 小ホール、2019 年 8 月 25 日(日)14:00～17:30

7.会員動向(2019 年度)入会 10 人、退会 4 人(2019.9.1 現在)会員数 98 人

第 2 号議案 2019 年度収支決算報告および会計監査報告について(園部真幸・稲川和幸・野村信史)別紙参照

第 3 号議案 2020 年度(2019.9–2020.8)役員等(案)について(安藤厚)　新任

(会則第 6 条に基づく役員)

会長:安藤厚

副会長:小笠原正明、霜田千代麿

運営委員:新井藤子、安藤むつみ、氏間多伊子、熊谷敬子、小林暁子、小林浩子、坂田朋優、佐々木保子、霜田英麿、園部真幸、高橋健一郎、塚本智宏、中島洋、松井亜樹、松山敏、水田香、ラファウ・ジェプカ、アグニェシュカ・ポヒワ

事務局長:小笠原正明

監査委員:稲川和幸、嵩文彦

(会則第 15 条に基づく事務局、会誌編集委員会)

事務局:(事務局長)小笠原正明、(副事務局長・会計)園部真幸、(渉外)ラファウ・ジェプカ、(催物)氏間多伊子、(同)熊谷敬子

会誌編集委員会:氏間多伊子、熊谷敬子、塚本智宏、松山敏、ラファウ・ジェプカ

(会則第 16 条に基づく東京事務所)

東京事務所:(所長)霜田英麿、(副所長)熊倉ハリーナ

第 4 号議案 2020 年度活動計画について(小笠原正明)

1.《第 33 回定例総会＆懇親会》、豊平館、2019 年 10 月 12 日(土)15:30～16:30 総会 1F 下の広間、17:30～19:30 懇親会 2F 広間

【11 ページ下につづく】

2020年度　会計予算書(自2019年9月1日～至2020年8月31日)　(単:円)

【収入の部】	前年度決算	予　算	備　考	参考 2018決算
会　費	264,500	255,000	3千円×85人(納入率85%)	238,500
寄付金	68,000	40,000	2017年度実績程度(2018/19年度は特例)	98,037
雑収入	140,002	10	貯金利子	2
小　計	472,502	295,010		336,539
前年度繰越金	153,552	293,113	2019.9実績	376,077
合　計	626,054	588,123		712,616
【支出の部】				
事業費	103,529	100,000	総会・懇親会4万、例会4回	173,333
連絡費	105,313	100,000	ポーレ発送等(2.5万×3号)、その他DM2.5万	106,016
編集費	73,995	60,000	ポーレ印刷費等(1.5万×3号)、その他チラシ等1.5万	31,432
会合費	19,872	25,000	運営委員会他(5回)	22,997
事務費	24,832	25,000	用紙、文具、コピー他(前年度実績程度)	75,664
雑費	5,400	5,000	HP経費(前年度実績程度)	9,622
予備費	0	273,123		140,000
小　計	332,941	588,123		559,064
次年度繰越金	293,113	0		153,552
合　計	626,054	588,123		712,616
演奏部会基金			備　考	
前期繰越金	34,697	71,767		34,697
特別会計より繰入	37,070	0		0
利息(北洋銀行)	0	0		0
合　計	71,767	71,767		34,697

2019年度 収支決算書（自2018年9月1日～至2019年8月31日）　（単：円）

【収入の部】	予　算	決　算	備　考
会費	240,000	264,500	全額（3千円×98人）の90%
寄付金	40,000	68,000	
雑収入	140,010	140,002	貯金利子+2018助成金立替分14千入金
小　計	420,010	472,502	
前期繰越金	153,552	153,552	ゆうちょ銀行
合　計	573,562	626,054	
【支出の部】			
事業費	100,000	103,529	32総会40千、87例会大理石の男14千、88例会尾形7千、89例会ピウスツキ11千、91例会カティン13千、33総会19千
連絡費	85,000	105,313	郵送・はがき・切手
編集費	45,000	73,995	POLE95-97・例会チラシ印刷
会合費	25,000	19,872	運営委員会4回
事務費	20,000	24,832	トナー9千、封筒7千、ラベルシール4千、用紙3千、コピー2千
雑費	5,000	5,400	HP経費5千、振込手数料
予備費	293,562	0	
小　計	573,562	332,941	
次期繰越金	0	293,113	ゆうちょ銀行
合　計	573,562	626,054	
演奏部会基金	**【収入の部】**	**【支出の部】**	**備　考**
前期繰越金	34,697	0	
特別会計より繰入	37,070	0	記念演奏会（2018）より入金2018.10.5
利息（北洋銀行）	0	0	
合　計	71,767	0	次年度へ繰越
特別会計			
1. 雪像チーム			
助成金	100,000	100,000	ポーランド大使館より（交通費・食費補助）
2. ポエジア9			
ポエジア経費		50,059	飲食費40千、機器レンタル3千、印刷3千、郵送2千、雑
一般会計より補助	59		
助成金	50,000		ポーランド広報文化センターより
3. 北大祭テント			
助成金	100,000	100,000	ポーランド広報文化センターより（レンタル費、テント登録費

会計の監査にあたり、関係書類及び通帳を照合した結果、適正に処理されていることを確認しましたのでここに報告します。

2019 年 9 月 27 日　監査委員　野村信史　印

2019 年 9 月 27 日　監査委員　稲川和幸　印

2.例会など

(1)①講演会「二風谷アイヌ文化博物館特別展の見どころ」講師:長田佳宏氏ほか、札幌エルプラザ 4F 第 3 研修室、2019 年 11 月 6 日（水）18:30～②二風谷博物館特別展見学ツアー、11 月 17 日（日）9:00 札幌発、特別展+井上紘一氏講演とドキュメンタリー映画『Ainu｜ひと』のつどい、19:00 札幌着

(2)ポーランドサロン（1）「ポーランドってどんな国?」講師:ラファウ・ジェプカ氏、札幌エルプラザ 4F 大研修室 C、2019 年 11 月 29 日（金）14:00～

(3)ポーランド名画ビデオ鑑賞会

(4)レクチャーコンサート、2020 年 3 月

(5)第 10 回朗読会「午後のポエジア」2020 年 5 月

3.会誌 POLE No.98 (2019.9), No.99 (2020.1), No.100 (2020.5)

4.オンライン広報の強化(Facebook、Twitter)

5.その他の後援・協力依頼には随時対応

第 5 号議案 2020 年度予算(案)について(園部真幸)
別紙参照

【出席会員 16 名、全議案承認。2019/10/12】

第 71 回さっぽろ雪まつり大通 7 丁目会場

HBC ポーランド広場

2020 年 2 月 4 日（火）～11 日（祝・火）

日本・ポーランド国交樹立 100 周年を記念して、ポーランドの首都ワルシャワにある「ワジェンキ公園の水上宮殿とショパン像」の大雪像が制作されます。

特設ステージでは、日本に住む外国人による「ワールド KARAOKE グランプリ 2020」やポーランドのフォークダンスなど、多彩な催しが企画されています。

◇大雪像データ（予定）高さ：地上 14m、幅 26m、奥行き 20m、縮尺：実物の 1/2 程度、制作人員：のべ約 3,650 人（陸上自衛隊北部方面通信群）、制作期間：28 日間、雪輸送開始 1 月 7 日（火）

◇企画：HBC 北海道放送、大雪像制作：陸上自衛隊北部方面通信群、協力：駐日ポーランド大使館、後援：ポーランド広報文化センター、北海道ポーランド文化協会

ショパン像

ワジェンキ宮殿

2020 年 3 月のイベント

《第 94 回例会》ポーランドサロン(2)〈ポーランド語でご挨拶〉札幌エルプラザ 4F 中研修室 A、2020 年 3 月 5 日（木）14:00～16:00、講師アグニェシカ・ポヒワ、参加費無料、定員 15 名（先着順）

入会・退会（敬称略、2019.9～12）

入会：鈴木彰男、三上和子
退会：琴崎多美絵、古屋育子、若松雅迪

ご寄付ありがとうございます（敬称略、順不同）

（2019.9～12、1 口千円）(7)霜田千代麿 (4)松山敏 (2)徳田貴子、嵩文彦、土橋芳美、長屋のり子、三上和子、高橋健一郎、山本伸一、安藤厚・瞬・むつみ、松山敬子、栗原朋友子、亀岡延枝、カジメシュ・コグト、小林暁子、佐々木保子 (1)高岡健次郎、和田芳子、前田理絵、中條峰人、中島洋

年会費・ご寄付の納入は下記口座へ

【郵便振替口座】記号 02740 5 番号 19735
【加入者名】北海道ポーランド文化協会
　または
［北洋銀行（本店営業部）普通預金口座］
［店番号］028［口座番号］0605084
［名義］ホッカイドウポーランドブンカキョウカイ
北海道ポーランド文化協会　会長　安藤厚

※ご請求額については、個別の納入お願い文と郵便振替用紙を同封します。

目　次

第 33 回定例総会&懇親会（松山敏）…… 1
『COLD WAR あの歌、2 つの心』映画の感動をシェア！（安藤厚・氏間多伊子・佐藤晃一・松山敏）…… 2
ポーランド&ニッポン歳時記 31（津田モニカ、ピョトル・ヴジェチョノ、霜田千代麿）…… 3
《新刊紹介》『ワルシャワ便り』岡崎恒夫著（栗原朋友子）…… 4
二風谷ツアーに参加して（三上和子）…… 4
アマレヤとアイヌ女性の舞踏劇の理解のために（丸山博）…… 5
ダヌタさん、日本上陸へ（井上紘一）…… 6
《新会員のひと言》（小田晃孝・中條峰人）…… 7
ズビグニェフ・ヘルベルト詩集『我思う氏 Pan Cogito』より（栗原成郎訳）…… 7
第 33 回定例総会議案・予算書・決算書…… 9
第 71 回さっぽろ雪まつり 大通 7 丁目会場 HBC ポーランド広場…… 12

POLE

第 99 号 ポーレ編集委員会
氏間多伊子／熊谷敬子／塚本智宏／松山敏／ラファウ・ジェプカ

POLE No. 99 (January 2020)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

33rd Annual Meeting and reception on Oct. 12, 2019 (Report: S. Matsuyama) 1
On the Polish film “COLD WAR” by Pawel Pawlikowski (A. Ando, T. Ujima, K. Sato and S. Matsuyama) 2
Haiku Yearbook: Poland & Japan 31 (Monika Tsuda, Piotr Wrzeciono and Ch. Simoda) 3
(New Publication) "News from Warsaw" by Tsuneo Okazaki (T. Kurihara) 4
Impressions of a tour to Nibutani Ainu Culture Museum (K. Mikami) 4
For better understanding of dance performances by Amareya Theatre and Ainu Women (H. Maruyama) 5
Danuta Onyszkiewicz is soon to land in Japan (K. Inoue) 6
New members’ messages (A. Oda and M. Nakajo) 7
Poems by Zbigniew Herbert: from “Pan Cogito” (translated by S. Kurihara) 7
33rd Annual Meeting: activity report and plan, settlement and budget 9
71st Sapporo Snow Festival, HBC Poland Square at Odori 7-chome 12